

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00442

研究課題名（和文）ハビトゥスの歴史的・文化史的考察

研究課題名（英文）Historical and cultural Researches on the Habitus

研究代表者

香田 芳樹（Koda, Yoshiki）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：20286917

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代思想の重要なキーワードのひとつであるハビトゥス（習慣）概念が歴史的にどのように発展してきたかを通時的観点で考察する一方、それが特定の時代区分にどのような社会現象となって現れたかを共時的視点から解明することを目的とした。これによって、ハビトゥスが古代ギリシアのポリス形成時に始まり、13-14世紀ヨーロッパでの科学革命と大学教育改革、19世紀ドイツにおける市民社会形成期、そして現代社会にいたるまで「変化する時代の要請にこたえた社会思想」の役割を果たしてきたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハビトゥスが古代ギリシアから中世、近世を経て現代にいたるまで長い射程をもつ思想であることが再検証された。とりわけ19世紀の市民社会形成期の性モラルの変転をハビトゥス論の視点から解明できた功績は大きい。それに加え、現代におけるこの思想の代表者ピエール・ブルデューの最初期のハビトゥス論を日本で初めて紹介することで、本邦におけるハビトゥス研究に貢献できた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine from a diachronic perspective how the concept of HABITUS, one of the most important keywords in modern thought, has developed historically, while at the same time clarifying from a synchronic perspective what kind of social phenomenon it has manifested as in specific periods. This revealed that habitus has played the role of "a social thought responding to the demands of a changing era," from the formation of the polis in ancient Greece, through the scientific revolution and university education reform in 13th and 14th century Europe, through the formation of civil society in 19th century Germany, and on to modern society.

研究分野：German Studies

キーワード：ハビトゥス Habitus ブルデュー Bourdieu 習慣 マイスター・エックハルト Meister Eckhart Sexual revolution

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代思想の重要なキーワードのひとつであるハビトゥス(習慣)概念がヨーロッパ精神史の中でどのように歴史的に形成されたかを究明し、さらにその文化史的、人間学的意義を解明しようとするものである。アリストテレスにまで遡れるハビトゥスは、ストア派の哲学者を経て、中世のスコラ学者達によって徳の完成としての地位を確立し、近代を経て現代のブルデューへと受け継がれてきた。ハビトゥスを通時的に考察することで、それが近代化にともない変化した生活環境に適応することを迫られた人間が、自身の倫理観と世界観を新たに組み替えるために生み出した思考装置であることを明らかにしたい。

### 2. 研究の目的

研究の目的のひとつは、ハビトゥスを通時的観点で考察することであり、また同時にそれが特定の時代区分にどのような社会現象となって現れたかを共時的視点から解明することである。これによって、ハビトゥスが古代ギリシアのポリス形成時に始まり、13-14世紀ヨーロッパでの科学革命と大学教育改革、19世紀ドイツにおける市民社会形成期、そして現代社会にいたるまで「変化する時代の要請に応えた社会思想」の役割を果たしてきたことが明らかになる。

### 3. 研究の方法

個別の思想家における習慣論の研究は存在するが、それらが歴史的ハビトゥスとして人間の社会的行動や倫理的判断を規定しているという歴史的な観点での研究はいまだ少ない。本研究ではそれゆえ、アリストテレスから、中世キリスト教思想家マイスター・エックハルトを経て、ドイツ観念論哲学者ヘーゲルの法哲学を経由し、現代のベルクソン、ブルデュー、エリアスにいたるハビトゥス論の発展史を体系的に記述し、それらが時代の要請に応えた一種の社会思想であることを明らかにした。

### 4. 研究成果

研究初年度 2021 年は新しい倫理基準としてハビトゥスの古代から中世にいたる位置づけを検証した。論文『Tugend und Glück. - Habituskonzept bei Aristoteles und Meister Eckhart』(徳と幸福 アリストテレスとマイスター・エックハルトにおけるハビトゥス構想)において、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で論じた「幸福」論を分析し、個人の幸福と社会の安定のために「習慣化された質」が倫理的に要求されたことを証明し、これがギリシアの都市国家(ポリス)の理念と符合していることを示した。そうした社会観は中世に入って、トマス・アクィナスやマイスター・エックハルトの習慣論に受け継がれた。トマスの神学的体系的ハビトゥス研究と並んで、エックハルトが『教導講話』で示した、修徳の教えには社会生活を営む修道士のもつべきハビトゥスが説かれているが、これは教会権力の低下による信仰の個性化が大都市で引き起こした「新たな敬虔」(デヴォーチオ・モデルナ)に対する答えであった。アリストテレスが社会倫理として強調した「中庸」が、ここでは「不動」(Beständigkeit)に読みかえられ、過激な宗教性を牽制している。ここから、新興の托鉢修道会の長として、都市市民の新たな信仰スタイルに対応するためにエックハルトが提唱したハビトゥスは、都市生活の新たな倫理基準を理論的に下支えする役割を果たしていたという結論を導いた。

引き続き 2022 年度はこの成果の上に、次の二つの研究成果を出した。

1) 中世後期に大学を中心起こった科学革命は、中世キリスト教神学を基礎におく学問体系から脱し、合理主義的実証主義へと知のパラダイムを転換させた。桂冠詩人として文学史に不滅の名を刻んだダンテもアリストテレス哲学の信奉者で、『神曲』の中で「三位一体論」、「自由意志論」、「能動知性と可能知性」、「至福直観」といった当時の神学界を賑わせた論争に言及している。論文『Sapienza, amore e virtute. - 『神曲』にあらわれたスコラ哲学的主題について』ではダンテが生きた時代の思想状況と照らし合わせて、『神曲』の「天国篇」が大学を中心として起こった知のハビトゥスの変革に関わっていることを証明した。

2) 18 世紀の啓蒙主義から 19 世紀初頭の「家族」のハビトゥスの変遷を研究課題とし、その成果は、『家族の習俗から社会の法へ ヘーゲル『法の哲学』における市民的ハビトゥスの構想』として発表した。18 世紀の近代市民社会の成立は、家族のあり方に多様性をもたらした。それは男女の間の恋愛関係が結婚へと続く過程で、封建的・父権的構造を脱し、個人の選択と責任に委ねられるようになったことを意味している。ヘーゲルの『法の哲学』は実証主義の影響のもと、家族と市民社会と国家の関係を哲学的弁証法的発展の中で叙述しようとした講義録である。本研究では、その弁証法的社会観の限界を指摘し、因習的なハビトゥスから作られた家族の「習俗」(Sittlichkeit)が市民の「法」へ発展していく過程に注目し、家庭という親愛圏が公共圏と対立的な緊張関係のもとに自己変容を起こすことを論じた。ヘーゲルの結婚観と家族論の問題点を検証するために、同時代の文学作品に描かれた結婚観と家族観との比較をおこなった。文学史における記念碑的作品である、レッシングの『エミーリア・ガロットィ』や、シラーの『たくらみと恋』、シュレーゲルの『ルツィンデ』は、個人が独立して家族が解体し、市民社会へと再編されるのではなく、家族が旧来の恋愛価値観と対決しながら、公共的市民社会を下支えする要素となっていく過程を描いている。この点でヘーゲル哲学の家族観、恋愛観が一面であることは否めない。その理由の 1 つに、「性革命」と呼ばれた、19 世紀の大きな性風俗の変化があったこ

とを指摘した。19 世紀社会を襲った性意識の劇的な変化が哲学と文学の描く家族間に影響を与えていることを、社会学の研究成果に基づいて論じた。

2023 年度は現代フランスにおけるハビトゥス論の代表的論者ブルデューを研究の中心に据え、この思想の現代における意義を確認した。ブルデューがハビトゥスを集団、組織、共同体の形成因として働くものと定義してすでに 60 年近くが経過したが、この着想を彼は、美学者アーウィン・パノフスキーが『中世ゴシック建築とスコラ学』の中で使った「メンタル・ハビット」から得ている。そのことは彼が記した「あとがき」にはっきり読み取れるが、これにはこれまで邦訳がなく、研究上の空白となっていた。研究代表者はこれを解説を付して全文翻訳し、現代のハビトゥス論の原点を明らかにした。

またブルデューのハビトゥス研究で教育機関、とりわけ大学教授のハビトゥスが重要な位置を占めていることに注目し、2023 年 10 月『カリスマ教師とその弟子たち』というシンポジウムを 3 名の研究者と日本独文学会秋季大会で開催し、研究発表を行った。これにより第一次世界大戦の敗戦国ドイツやオーストリアで戦間期に人文科学への期待が増大し、多くの若い研究者が有名大学教授のもとに参集し、「学派」が形成されたことを論じた。

人文科学の興隆は「カリスマ」の人気を博した大学教授を生み、コレージュ・ド・フランスのベルクソンの講義に学生のみならず一般聴衆も殺到したことは有名である。ドイツでもフライブルク大学のフッサールとハイデガーのもとに多くの哲学徒が参集し、ベルリン大学ではシュトゥンプフの門下生によってゲシュタルト心理学派が形成された。またゲオルゲを師と仰ぐ知識人グループはこうした大学での思想潮流と連動しながら古典の復興を目指した。しかし 1930 年代のファシズムの台頭とともに、こうした機運は急速に勢いを失い、人間主体の復権を求める生の哲学や宗教的精神主義といった狭隘な全体主義に変質するが、その反面、全体を共生的認識の視点から捉えるゲシュタルト論や集合論へと展開する全く別の動力をも得た。「師と弟子」という視点が有効なのは、当時敗戦によって指針を失った社会が人文的教養に答えを求めたからである。戦間期は大学教育が社会において主導的な役割を果たそうとした時代であり、この担い手をウェーバーが宗教社会学に援用したカリスマ概念によって再考することは、大学教授が教育現場で果たした功罪を問う意味でも科学史上の重要性をもっている。第一次大戦後のドイツ科学の再興を担ったユダヤ人科学者が同化の過程で自己否定に陥るという奇妙なねじれと、同化を問題視する民族国家主義の台頭の軋轢の中で、師弟関係と学問潮流がどのように変容していったのかを 4 名の論者が検証した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 香田芳樹	4. 巻 124
2. 論文標題 『家族の習俗から社会の法へ ヘーゲル『法の哲学』における市民的八ビトゥスの構想』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 香田芳樹	4. 巻 121-1
2. 論文標題 Tugend und Glueck: Zum Habituskonzept bei Aristoteles und Meister Eckhart	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 80-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Koda, Yoshiki	4. 巻 21
2. 論文標題 Rhetorik und Parresia. Zum Offenbarungsmodus von Geheimlehren in Antike und Mittelalter	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Darstellung und Geheimnis in Mittelalter und frueher Neuzeit	6. 最初と最後の頁 231-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 香田芳樹	4. 巻 135
2. 論文標題 Sapienza, amore e virtute. - 『神曲』にあらわれたスコラ哲学的主題について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 28 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 香田芳樹	4. 巻 125
2. 論文標題 ビエール・ブルデュー：アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』へのあとがき 解題と翻訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 香田芳樹
2. 発表標題 Sapientia, amore e virtute 『神曲』にあらわれたスコラ哲学的主題について
3. 学会等名 世界文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 香田芳樹
2. 発表標題 三つのモノダ論 第二次世界大戦前夜における個我と国家の問題について
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Darstellung und Geheimnis in Mittelalter und frueher Neuzeit.	開催年 2021年～2021年
---	--------------------

国際研究集会 カリスマ教師とその弟子たち 戦間期ドイツにおける人文科学の再生と変容	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ベルリン自由大学			